

扉

十年すごした部屋の扉に立つ
黒くすすけてがらんだ部屋の
何もかもが消えた部屋

胸ときめかせて笑い、ときに激しく泣いた日々も
不器用に汗してきた自分も
育みたかった愛もぬくもりも

扉の前で、深く頭をさげる
どんなときも見守ってくれていたこの部屋に
愚かなわたしが大切にできなかったものたちに
この部屋を出ていく覚悟をこめて

扉をとじるとそこは
風吹きすさぶ荒野のようだった
何も見えず、どこへ向かえばいいのかもわからず立ちつくしていた
新たな扉があることなど思いもせず、さまよっていた

すでにほんとうの扉を開けつつあることなど
気づくこともないままに